

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第

卷九十三第

行發日一月八年九和昭

哀辭  
故田島博士近影及署名  
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

### 論叢

骨牌税に就きて……………法學博士 神戸正雄  
供給曲線の性質……………文學博士 高田保馬

### 時論

輸出統制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

### 研究

貨幣的景氣論史……………經濟學士 柴田敬  
金物價と貨幣價值安定……………經濟學士 松岡孝兒  
アダム・スミスの廉價即豐富論……………經濟學士 白杉庄一郎

### 記事

田島博士逝く  
故田島博士年譜及著書論文目錄  
追憶文

織田萬 神戸正雄  
河田嗣郎 本庄榮治郎  
山本美越乃  
小島昌太郎  
谷見三郎 黒正巖  
田島順  
大國壽吉  
石川興二

### 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

## アダム・スミスの廉價即豊富論

白杉庄一郎

「廉價即豊富 Cheapness or Plenty」とはアダム・スミスが「正義・行政・收入及び軍備に關する講義 (Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms)」の第二部「行政論」第二章に附した題目である。彼は講義の序言に「行政の目的とする處は財の廉價を圖り且つ公安並に清潔を維持するにある、この項目の下に一國家の富裕を考察せん」といひ、又行政論の冒頭には行政といふ「この名稱は佛語にして、もとギリシヤ語 *noiktia* より出で、その意味は本來政府の政策といふことであつたが、當今ではたゞ政治の比較的下級部分の制規、即ち清潔公安及び廉價即豊富を意味するに過ぎぬ」と述べてゐる。而して清潔公安なる二項目は極く簡單に扱はれて行政論の主要部分を占めるのは廉價即豊富の論である。ところでこの講義の行政論は收入論・軍備論と共に獨立せしめられて富國民論となるのであるが、その中心は行政論特に廉價即豊富論にある。とすれば富國民論即ちスミス經濟學の骨子は廉價即豊富論に於て把握され、これこそスミス經濟學の根本思想であると考へられる。そこで吾々はスミス經濟學の原始形態たる廉價即豊富論を中心として、廉價即

- 1) Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, by A. Smith, ed. by E. Cannan. (1896) p. 3.
- 2) ibid. p. 154.
- 3) ibid. p. 154—5
- 4) Wealth of Nations. Cannan's Introduction p. xviii 參照。

豊富のスミス經濟學に於ける意義を稽え、それが市民社會に於いては如何に矛盾するに至るかを  
見ることによつて、經濟學精神反省の一助に資せんとするのである。

## 二

スミスは廉價即豊富論を始めるに當つて曰く、

「廉價即豊富の考察即ちそれは富と富饒とを獲得する最も適當なる方法 (the most proper way of procuring wealth and abundance) と同一事である。實際廉價は豊富と同一事である (Cheapness is in fact the same thing with plenty)。水が汲揚  
げるだけの値で獲られる程廉價なのは水の豊富さの故に外ならぬ、而してダイヤモンドが非常に高價 (dear) なのはその稀少  
性 (scarcity) の故である (何故ならダイヤモンドの眞の效用はまた發見されてゐない様に思はれるから)。」<sup>1)</sup>

スミスが廉價と云ひ、豊富といふのは、上述の如く「行政の目的」としての財の廉價であり、政  
治の對象としての廉價即豊富であるから、勿論全體としての國民の立場に於てである。この事  
を最も特徴づけるのは、彼が「人間の自然的欲望」<sup>2)</sup>と言つて人間の經濟的必要から廉價即豊富論を  
起してゐる事である。従つて彼は即自的には單なる生産者をでもなく、又單なる消費者をでもな  
く、全體として人間の必要のために生産し消費するところの國民全體の立場に立つてゐるのであ  
る。

國民的立場に於て「國民の富」とは富國民論卷頭の句から容易に推察される如く、「國民が年々消  
費し、而して國民の年々の労働の生産物又は其の生産物を以て他國民から購はれるところの物に  
存するところの凡ての生活の必要品並に便宜品」である。約言すれば、國民労働の生産物 (労働價

1) Lectures. p. 157.  
2) ibid. p. 157-161.

値)にして、國民の生活に有用なる物財(使用價值)の集積である。しかも國民生活に於ける經濟生活の文化的意義から最少の國民勞働によつて最大の使用價值が生産されることが要求される。従つて國民の富の要素たる個々の富の一般的構造は勞働價值と使用價值との統一にして、しかも前者を最少ならしめ後者を最大ならしむるが如き統一である。<sup>1)</sup> 最少の勞働を以て最大の使用價值を得んとするのは所謂經濟原則の一般的抽象的な形である。スミスの廉價即豐富の主張は一般的にはこの經濟原則を言ひ現はしたものである。廉價とは本質的には等量の使用價值が「より少い勞働量によつて生産される (produced by a smaller quantity of labour)」<sup>2)</sup> といふ事である。等量の使用價值がより少い勞働量によつて生産されるといふことは、同一量の勞働がより多くの使用價值を生産するといふ事であるから、廉價の反面は富の豐富である。例へば一國民が全一體として經濟的生産を行ふ共同體を考へるならば、可及的最少の勞働を以て生産された富は共同體に最少の犠牲をしか要費しないが故に最も廉價である、而も同一の總勞働量は以前よりもより多くの結果を齎すが故に共同體の富は豐富となる。かくして、國民の富に關しても、或はその要素たる個々の富に關しても、富の一般的構造に於ては廉價と豐富は、一般的經濟原則の形で、矛盾することなく互に反面をなして、「廉價と豐富とは同一事である」。而して「一國の富裕は食料其他の貯財の豐富と廉價に存する」<sup>3)</sup>。反之、高價は稀少と同一事であり、<sup>4)</sup> 高價と稀少は國民の貧困である。

右の如き意味に於て國民の富の廉價を圖りその豐富を招來することがスミス經濟學の本來の精

1) かくの如き富 (wealth 時に riches) の豐富 (plenty) 或は豐饒 (abundance) なる状態が國民全體についても或は國家又は個人についても、それらの富裕 (opulence 或は時に riches) であらう。

2) W. o. N. ed. by Cannan. vol. I. p. 66.

3) Lectures. p. 130.

4) ibid. p. 178.

神であつた。かくて富國民論に發展せしめられた彼の經濟學の究極目的としての國民を富ませるといふ事の意義は「講義」にまで溯ることによつて一層明確となる。要するにスミスは國民を富ましめるに「最も適當なる方法」として廉價即豐富を經濟學の第一原理としてゐるのである。彼がこの觀點から講義の中に提唱した三の理論と政策——(1)分業による生産力の發展(2)價格論と獨占打破(3)富に關する謬見と貿易干涉の撤廢——を以下に略述しよう。

### 三

既に述べたところから廉價即豐富は勞働生産力の發展によつて實現されるといふ事は容易に理解されるであらう。だからこの原則は先づ第一に生産力の發展を要求する。スミスは、廉價は豐富と同一事であり、財の廉價を考察するは、その豐富の考察に歸するとの推論の下に、豐富の側から論を進める。財の豐富即ち富裕の進歩は富の生産力の發展に比例する。スミスは生産力の發展を「勞働生産力の進歩」に於て、勞働生産力の進歩を分業論に於て總括的に考察したと考へられる。富裕は分業から起る。分業なき未開社會と分業的文明社會との状態の比較は明かに之を示す。「野蠻民族に於ては各人は彼自身の勞働の全所産を享受するが、而も彼等の貧窮は何處に於けるよりも甚だしい。」とすれば「分業こそ一國の富裕を増大せしめるものである。<sup>1)</sup>」又「如何にして分業が生産物の増大を惹起するか、或は同じ事であるが、如何にして富裕が分業から起るか<sup>2)</sup>」の問題は、ピン製造の經驗的事實が教へる。分業の生産力増進に貢獻するはかの有名な三事情——熟

1) Lectures, p. 162.

2) ibid. p. 163.

練・時間節約・機械發明及びその應用の可能——に依存する。要するに分業は「富裕の直接原因」であり、「一般富裕の大原因」である。

右の如く豊富は分業即ち労働生産力の進歩に應じて増大する。然るに豊富は廉價と同一事である、スミスは分業の結果を廉價の側から見て言ふ。

「かくの如く労働が分割され、一人によつて、比例的に非常に多くなされるならば、彼等の生活維持以上の超過分は、それを各人は、若し彼がたゞ獨りてなしたならばなし能ふたであらうところの四倍と交換することが出来る。この方法によつて、財は遙かにより廉價 (cheap) となり、労働はより高價 (dear) となる。労働の價格は決して社會の富裕を決定しないといふ事が考へられねばならぬ、僅かの労働によつて豊饒を獲得し得る (a little labour can procure abundance) 時にのみ社會は富裕なのである。」

分業の結果、一方に於ては財は豊富となり、他方に於ては等量の使用價值の生産により、少量の労働が要費されるに過ぎなくなる結果財はより廉價となる。(而して同一量の財に少量の労働が要費されるといふ事は本質的には同一の労働がより大なる報酬を獲るといふ事である。)而も労働生産力が進歩すればする程益々富は廉價にして豊富となる。「僅かの労働によつて豊饒を獲得し得る」時は社會は富裕である。かくして廉價即豊富は先づ第一に労働生産力の發展を要求する。これスミスが「講義」に於ては欲求論の次に分業論をおき、富國民論を「労働生産力の増進」を以て始めた所以であり、<sup>(註)</sup>經濟學が先づ第一に労働生産力の發展を意欲しなければならぬ所以である。

(註) 更にスミスは、廉價即豊富論の一項目として商業史若くは富裕の遅々たる進歩の原因を考察してゐるが、それは分業論との關係に於てである。即ち富裕を來すのは主とし分業であるが分業は「資本の蓄積」を前提する、然るに資本の蓄積は、

1) *ibid.* p. 168.

2) *ibid.* p. 172.

3) 原文には“a fourth of”とある、“4 times”の寫し誤りであらうとの Cannan の脚註に従ふ。

4) *ibid.* p. 164-165.

5) *Lectures.* p. 222 以下。

第一、未開時代には「自然的障礙」により、第二、其の後は「政府の抑壓」によつて阻礙された、ために分業による生産力の進歩起らず、従つて富裕の進歩は遅々たるを得なかつたと論ずるのである。この點は、富國民論第一編の分業論と第二編資本論との關係理解の一方途を供するでもあらうが、それは兎も角、吾々はこゝにも廉價即豐富、換言すれば富裕と分業との關係をはつきり理解することが出来るのである。

#### 四

私的分業は自ら交換を惹起する。社會的分業と交換の必然的結果たる「商業社會」<sup>1)</sup>に於ては、富は商品として現れる。商業社會に於ける富裕を問題とするならば、必ず商品の價値は何であり、如何にして決定されるかを論究しておかねばならぬ。講義に於けるスミスに依れば、商品は一見獨立してゐるが互に關係を有つところの二の價格、自然價格と市場價格を有つ。彼は先づ自然價格から論じて曰く。

「人は次の場合には彼の勞働の自然價格を持つ、即ちその價格が勞働期間中自己を維持し、教育費を支拂ひ、充分に長く生き得ない危険、及びその事業に成功し得ない危険を償ふに充分である場合である。人がこの自然價格を持つ場合には、勞働者に對する充分なる獎勵が存し、商品は需要に比例して生産されるであらう、<sup>2)</sup>そしてその自然價格で賣られるであらう——  
キャナン脚註。」

こゝに云ふ自然價格は獨立手工業者の生産費によつて決定される價格とも考ふべきであつて、富國民論に發展せしめられた資本家的生産費によつて決定される自然價格とは異り、むしろ「眞價格」<sup>3)</sup>に近いものと考ふべきである。何れにせよ、自然價格は生産の側から自由競争下に於ける生産費によつて決定され、需要からは獨立してゐる。而もこれは、富國民論に明確に述べられて

1) W. o. N. vol. I. p. 24.

2) Lectures. p. 176.

3) W. o. N. bk. I. ch. V. — スミスは Lectures に於てはまだ交換價値の實體と考へられる眞價格を展開してはゐない。

る如く、「賣手が通常收め得る、と同時に其營業を繼續して行く事の出来る最低價格<sup>1)</sup>」である。ところで生産費は生産力の發展と共に低下する。従つてこれによつて決定される自然價格も下落する。つまり商業社會に於ては生産力の發展は自然價格の下落といふ形で現れる。だから前には一般的に生産力の發展を要求した廉價即豐富の原則は、商業社會に於ては自然價格の下落を要求するのである。

然しながら自然價格は交換價値の本質とも考へらるべきものであつて、その現實存在は市場價格である。そこでスミスは市場價格について曰く。

「商品の市場價格は全く他の事情によつて決定される。買手が市場に來る場合、彼は賣手に對して賣手がどれ程の費用をその生産に費したかを決して尋ねはしない。商品の市場價格の決定は次の三條項に依存する。即ち、――

第一には財に對する需要或は必要 (the demand or need for the commodity)。何ら效用のない物に對しては需要はない、それは欲望の合理的な對象ではない。

第二その必要に比しての、商品の豐饒又は稀少 (the abundance or scarcity of the commodity in proportion to the need)。若し商品が稀少であるならば價格は引上げられる、而してもしその量が需要を充すに充分であるよりも多いならば價格は下落する。かくしてダイヤモンド其他の寶石は高價であり、それよりも有用であるところの鐵はずつと廉價である。尤もこのことは最後の原因に基くのであるが、即ち、

第三には需要者の貧富 (the riches or poverty of those who demand) である。總ての人に提供するに充分に生産されない場合には競買者達の財産が價格の唯一の決定者である。……商品が稀少である場合には、賣手は、それを買ふ人々が持つてゐるところの富のその程度で満足しなければならぬ。……この原理によつて、總ゆる物は、それが上流階級の購買物であるか、下層階級のそれであるかに應じて、より高價であり、或はより廉價である。……」<sup>2)</sup>

自然價格に對立する意味での市場價格はより多くの分析と吟味を必要とするが、それは別の機

1) ibid. vol. I. P. 63.

2) 富國論に於ける用語に從つてより嚴密に言へば、「未開社會」即ち單純商品社會に於ける交換價値の實體は「眞價格」、その現象形態は「名目價格」であり、「文明社會」即ち資本主義社會に於ける本質は「自然價格」、その現象形態は「市場價格」である。考へられる。(W. o. N. bk. I. ch. V--VII. 參照)

3) Lectures. p. 176-177.



會に譲り、以上の論述から次の事だけは明かである、即ち、市場価格は商品の豊富と共に下落すること、従つて廉價を圖るためには商品を豊富ならしめることの必要なこと。即ち「凡ゆる物に於て大なる廉價は大なる豊富の必然的、結果である。」<sup>1)</sup>而も市場価格は自然價格に對して「一見獨立してゐるやうであるが必然的聯關を有する」<sup>2)</sup>のであつて、商品が豊富でさへあれば市場価格は益々自然價格に近づき、終局に於て前者は後者に一致する。この傾向を妨げて長きに亙つて自然價格以上に固定されたる市場價格は獨占價格である。自然價格が最低價格であつたに對して獨占價格は「最高價格」<sup>3)</sup>である。獨占價格は國民的立場よりの廉價即豊富の原則に背反する。そこでミスは右の原理に基いて政策論を展開してゐる。

「上述せしところより吾々は云ふ事が出來よう、市場價格を自然價格以上に引上げんとする政策は何でも一般富裕を減少する傾向がある。高價と稀少とは實際同一事である (Dearness and scarcity are in effect the same thing)。諸商品が豐饒なる場合には、それらは、それらに對して僅かしか與へ得ないところの下層階級に賣られ得る、然るにそれらが稀少ならばそうではない。故に商品が社會にとつて便宜品である限り、少數者のみがそれらを持ち得る場合には、社會はより不幸な生活をなす譯である。従つて長く (for a permanency) 商品をその自然價格以上に保つところのものは何でも國民の富裕を減少する。」<sup>4)</sup>

市場價格を自然價格以上に高めて國民の富裕を減少する政策として(一)勤勞・生活必需品及び便宜品に對する課税、(二)獨占、(三)組合の排他的特權を批判してゐる。<sup>5)</sup>更に「市場價格を自然價格以上に引上げるところのものと同じく、市場價格を自然價格以下に引下げるところのものも同じ結果を伴ふ」として、補助金、獎勵金制度を批判してゐる。<sup>6)</sup>要するに廉價即豊富の原則は、自然價

1) W. o. N. I. p. 222.

2) Lectures. p. 173.

3) W. o. N. vol I. p. 63.

4) Lectures. p. 178-179.

5) ibid. p. 179-180. 廉價即豊富の觀點からの組合、獨占の批判は ibid. p. 130 にも見る。

6) ibid. p. 180-182.

格と市場價格との一致を要求し、前者以上に固定せしめられた市場價格即ち獨占價格を排斥する。獨占的市場價格は商品の稀少に依據する。「稀少は高價と同一事である。」國民の富裕が廉價と豐富に存するならば高價と稀少は國民の貧窮である。こゝに於て國民を富ませるためには、一切の獨占價格を排して自由競争價格の實現する社會を打樹てねばならぬ。スミスは政策的結論を下して曰く、「概して事物をしてその自然的進行に委せ (leave things to their natural course) 如何なる補助金をも與へず、如何なる商品課税をもなさない事が遙かに最善の政策である」<sup>1)</sup>と。廉價と豐富を齎す政策、即ち國民を富ませるための經濟學は嚮には分業に依る生産力の増大を要求した。今やそれは自然價格の實現を要求し、從つて獨占諸制度の撤廢を命ずるのである。

## 五

私的分業に基く交換は必然的に貨幣を發生せしめる。スミスに依れば貨幣は「價値の尺度」であり「交換の媒介物」である<sup>2)</sup>、而もその本原的機能は價値尺度にあるにしても「價値の眞尺度」ではない<sup>3)</sup>。從つて國民の富裕は貨幣の多寡には依存しない。この點に關するスミスの重なる主張は次の如くである。

「一國民の富裕は通貨の量に存するのではなくて、生活に必要な諸財貨の豐饒に存する、而して、これらの諸財貨を増加せしめる傾向あるものは何でも、それだけ一國の富裕を増大する傾向がある。

「貨幣は生活必需品の何れにも適しはしない。貨幣はそれ自身では食物・衣服・住居の何れをも供する事は出來ず、これらの諸目的に適する諸財貨と交換されねばならぬ」<sup>4)</sup>。

1) *ibid.* p. 182.

2) *Lectures.* p. 182-190.

3) *ibid.* p. 190. スミスは *Lectures* に於ては “..... it is to be observed that labour, not money, is the true measure of value”. と言つたのみで未だ労働價値説を展開してはゐない。

4) *ibid.* p. 192.

更に貨幣は死資本である、だから銀行・紙幣制によつて貨幣を節約し、ために過剰となれる貨幣を海外に輸出して諸商品を獲得するは國民の富を増大する所以である。

「或國の財を流通せしめるに必要な貨幣が多ければ多い程益々財の量は減少せしめられる。……従つて、貨幣はそれ自身死資本 (dead stock) であり、何ら人生の便宜品を供しないから、貨幣の増大するにつれて一國の貧困は増大するといふ事は明かである。この點に於て貨幣は自らは穀物も草も生じないが、一國の穀物や草の總てを循環せしめるところの大道にも比せらるゝであらう。若し吾々が大道によつて取上げられた土地を節約すべき何らかの方法を發見するならば、吾々は可成財貨の量を増加し、より多くを市場へ運ぶ事が出来るであらう。一土地の價値がそれを貫通するところの大道の數には存しないと同様に、一國の富は財貨を流通せしめるために使用される貨幣の量にはなくて、生活必需品の大豊饒なるに存する。従つて若し吾々が吾々の貨幣の半を財に轉化せしめらるゝために外國に送り、そして同時に國內流通の運行を補充すべき方法を直に開始するならば、吾々は大いに國の富を増加するであらう。」<sup>1)</sup>

海外に輸送される貨幣は「衣食住の材料品を内に賣す」べく、「凡そ如何なる財貨を輸入するにしろ正にそれだけ國富は増加される」<sup>2)</sup>。かくて貨幣の輸出を禁止するは謬策であり、通貨を節してその輸出を可能ならしむる「銀行を抑制するは惡政策」である。<sup>3)</sup>

富が貨幣に存するとの謬見として、Mun, Gee, Hume, Locke の學說を簡單に批判し、その結論にスミスは言ふ。

「要するに、吾々はこの問題について次の如く云ふ事が出来よう、即ち、吾々の富が貨幣に存するのではなくて、財に存するといふ事の理由は、貨幣は人生の目的の何れにも使用され得ない、然るに財は吾々の生活資料に適當したものであるといふことであると。財の可消費性 (the consumptibility of goods) といふ言葉を使つていふならば、これこそ人間の勤勞の大原因である、而して勤勉なる人々は常に彼等が消費する以上に生産するであらう。各國に於ける現金は一般富裕に對し如何に小さな割合を保つてゐるかを示すは容易である。……一國の富は貨幣に存するとの見解を支持する或る人によつて次の如

1) ibid. p. 191.  
2) ibid. p. 192.  
3) ibid. p. 195.

く言はれた、人が事業から隱退する場合には彼は彼の資本ストックを直に現金に替へると。然しこの理由は、貨幣は商業の用具であるから、人は他の何物よりも容易にそれを生活の必需品及び便宜品エレガンスと交換することが出来るといふ事であることは明かである。彼の金をその函の中に藏ひ込んでおく吝嗇家と雖もこの結果を目的としてゐる。正常の分別ある人ならば、何人と雖も、それ自身のために貨幣を貯藏しはしないのであつて、彼は彼の傍に貨幣を始終保持してゐることによつて、彼自身及び家族の全必需品を直に支給し得る力を有せん事を考へてゐるのである。<sup>1)</sup>

富は貨幣に存するとの謬見は、單に思想上の誤謬であつたばかりでなく、同時に「實際上、幾多有害なる誤謬<sup>2)</sup>」を惹き起した。かくの如き誤れる政策として、スミスは鑄貨の輸出禁止、利ある貿易平衡を得んとする試みの如き重商主義的政策を批判する。「内國消費は國富を損ふ筈なし<sup>4)</sup>」の謬想や、ローのミシシッピー計畫<sup>5)</sup>に導いたのもこの觀念であつた。

要するに國民の富は貨幣に存するのではなく、財の廉價即豐富に存するのである。モネタール・システムに基く總ての政策は財の豐富を妨げ、國富の増進を阻碍する。こゝから得らるゝ政策的結論は廉價即豐富のために、貨幣輸出禁止等其他一切の重商主義的貿易干涉の撤廢である。さきに獨占打破を叫べんたスミスはこゝでは自由貿易を主張する、一切の國民的偏見を根絶し、妨害なき自由貿易が確立さる<sup>6)</sup>べきであると。

## 六

スミスの廉價即豐富論の骨子は右の如くである。<sup>1)</sup>これは次の如く要約されよう。國民の富裕は富の廉價と豐富に在る。高價と稀少は貧困である。廉價即豐富は一般的には最少の勞働によつて

1) *ibid.* p. 199-200.

2) *ibid.* p. 220.

3) *ibid.* p. 200-207.

4) *ibid.* p. 207.

5) "Of the Scheme of Mr. Law". *ibid.* p. 211-219.

6) *ibid.* p. 206.

最大の使用價值が生産されること即ち即自的經濟原則を意味する。これは勞働生産力の發展によつて實現される。勞働生産力は分業によつて最も進歩する。ところが商業社會即ち市民社會の富は商品として、經濟價值は交換價值とし現れ、交換價值即ち價格は自然價格と市場價格とに分れる。そこで生産力の發展は自然價格の低下を來し、それを中心として動搖する市場價格を下落せしめる。この社會では廉價即豊富は自然價格の低廉といふ形をとる。だから國民主義的經濟原則は低廉なる自然價格の實現即ち市場價格の自然價格への一致を要求し、それを妨げる中世的獨占制の撤廢を命ずる。更に商業社會では交換價值は貨幣に於て獨立する結果、人は富が貨幣に存するか如く誤解する。けれど國民の富は生活上必要なる諸々の財の廉價即豊富に存するのであつて、貨幣に存するのではない、富が貨幣に存するとの謬見に基く諸種の重商主義的貿易干渉は廉價即豊富を妨げる故宜しく廢止せらるべきである。かくて國民を富ませるために廉價即豊富を圖るといふ事から、勞働生産力の發展と經濟的自由とが政策的に結論せられるのである。生産力發展と經濟的自由——勿論二者は單に並立するものでなく前者の發展によつて後者が必要となり、後者の實現による前者の發展が望まれたのである——の招來、これこそ中世的封建社會から近代市民社會への過渡期に於けるスミスの實踐的經濟學の歴史的使命であつたのである。

右の如くスミスは國民的立場に於て廉價即豊富を要求した。彼の經濟學の實現は近代市民社會の完成であつたが、この社會に於て彼が本來希求したところが果して眞に實現されたか、市民社

7) 以上何らの形で言及した問題の外「講義」の「廉價即豊富論」は利子爲替に關する簡単な所説 (p. 219-22) 及び商業の人民風習に及ぶ影響 (p. 253 以下) の考察を含む。前者は本論の本筋には殆んど關係を有たぬし、後者はかつての草稿(經濟論叢、3卷、6號「アダム・スミスに於ける經濟史觀」)において問題としたところであるから、觸れないでおく。

會は彼の經濟學的精神に矛盾することはないか、以下この方面から若干の吟味を加へよう。——  
 そのために吾々は國民の富の發展を一應自覺して置く必要がある。原始共同體では國民の富は即  
 自的な自然的共同富として存する。然るに市民社會では國民の富は向自的に分裂の形をとる、即  
 ちそれは現實には國民個人々の私有の富として現はれ、共同富の面は背後に影をひそめる。<sup>1)</sup>共同  
 富は存在しないのではないが、現實の背後に存するが故に概念的にのみ把握され得るに過ぎない。  
 スミスが *common stock*<sup>2)</sup> といひ、ヘーゲルが *das allgemeine Vermögen*<sup>3)</sup> といつたのはこの共同富  
 の面である。この抽象的な共同富が本然の姿に復歸せしめられる時、具體的な國民共同體の富と  
 なる。三の段階に應じて國民の富の要素形態たる個々の富も第一には無規定的な富、第二には商  
 品、從つてこゝでは、經濟價值は交換價值として現はれる、第三には自覺的に使用の目的を以て  
 一定の勞働によつて生産された具體的な富である。——そこでこの觀點から、吾々が國民的立場  
 に立ち、共同富の面を考へる場合、スミスの廉價即豐富の主張はそのまゝ承認しなければならな  
 い。國民が全一體として經濟生活をなす共同體に於ては、勞働生産力を増大して生産費を最少に  
 し富を豐富ならしめるは疑もなく國民を富裕にして以て幸福ならしむる所以である。然るに市民  
 社會に於ては國民の富といふのは抽象的概念に過ぎず、その現實の存在は個人の富である。そこ  
 でスミスの廉價即豐富論は近代市民社會に於て如何に歪曲されざるを得ぬかを見なければなら  
 ぬ。

1) 市民社會に於ても共同富は國家其他公團體の富として、一部分現實の形  
 を持つてゐる。然しこれら個人間的富の共同性も個人間的富の共同性も  
 市民社會に於ても共同富は國家其他公團體の富として、一部分現實の形  
 を持つてゐる。然しこれら個人間的富の共同性も個人間的富の共同性も  
 市民社會に於ても共同富は國家其他公團體の富として、一部分現實の形  
 を持つてゐる。然しこれら個人間的富の共同性も個人間的富の共同性も

3) Hegel. Rechtsphilosophie. § 99 ff.

2) W. o. N. I. p. 18.

(一) 市民社會に於ては生産力の發展はその割合には商品を廉價ならしめない。生産力の發展は成る程豊富と廉價を齎した、然し豊富の割には廉價でない。蓋し市民社會では土地・資本は私有され、その結果勞働生産物の一部は地代及び利潤として獲得され、而もこれらは市民社會の生産費に入込み、生産力の發展と共に自然價格は必ずしも低下しないからである。市民社會に於ける富の低廉化の抵抗は土地と資本の私有であるとスミス自身も考へた。(勿論この事は土地資本の私有が生産力を大いに發展せしめたことと矛盾するものではない。)富國民論中に曰く、

「土地の私有並に資本の蓄積未だ行はれざる事物原始の状態に在つては、勞働の全生産物は勞働者に歸屬する。勞働者はこれを彼と共に頒つべき地主も雇主も有たぬ。若しも此状態が持續したならば、勞働の賃銀は分業の來す勞働生産物の一切の改良増進と共に増大したであらう。そして總ての物は漸次より廉價(cheap)となつて來たであらう。即ち總ての物は従前よりもより少い勞働量によつて生産された(produced by a smaller quantity of labour)であらう。そして等しい勞働量を以て生産される財貨はこの状態に於ては當然相互に交換されるであらうからして、其等は亦より少い勞働量の生産物を以て購はれたであらう。」<sup>1)</sup>

此の状態は土地の私有及び資本の蓄積に依つて終止せしめられた。従つて、市民社會に於ては、生産力發展の割合に應じては商品は廉價とはならないのである。

(二) 市民社會に於ける生産力の發展は成る程抽象的共同富を増大せしめるが、國民個人個々人の富を、絶對的にはともかく、相對的には必ずしも増大せしめない。國民諸個人の富は階級の別に應じて、所謂市民及び地主ブルジョワの富と勞働貧民及び農民の富とに分つて考へねばならぬ。生産力の發展は前者により有利にして後者には相對的に不利である。國民の富の増進のために生産力の發展を

分業の名に於て主張したスミスは同時に正しくも分業社會の矛盾を指摘して言ふ。

「文明社會に於ては、分業は存するけれども平等なる分配ディヴィジョンはない、何となれば少しも働かない多くの人々があるから。富裕の分配は仕事に一致しない。商人の富裕は、彼はより少く働くが、彼の凡ての店員よりも大である、更に彼等はより激しく働くところの同数の職人アーティザン達よりも六倍も多くの富裕を持つてゐる。室内で氣樂に働く職人は休みなくあちらこちらと歩き廻る貧しき勞働者(the poor labourer)よりも遙かに多くを持つてゐる。かくして、云はゞ、社會の重荷を背負つてゐる者が最少の利益を持つてゐるのである(the who as it were bears the burden of society, has the fewest advantages)」<sup>1)</sup>

市民社會に於ける國民の富の現實に存在する形態たる諸個人の富を考察すれば「社會の重荷を背負つてゐる」勞働貧民と然らざる者との對立が顯はとなり、生産力を發展せしめて國民を富ますといふことの市民社會に於ける第二の矛盾が明かとなる。國民的生产力の發展による一般的共同財産の増大は、生産の主體たる國民勞働の報酬増大であるべきであるのに、實際直接に生産する「勞働貧民即ち大多數人民」は富裕なる生活をなし得ない、即ち生産力の發展は必ずしも國民諸個人の富を豊富ならしめないものである。

(三) 市民社會は必ずしも商品を廉價ならしめないのみならず、却つて高價をすら要求する。ミスは國民的立場に於いて人間の自然的欲望充足のための經濟を考へて來たのであつて、分業の結果生産と消費とが分離した市民社會に於いても彼は全體的消費者的觀點を貫いてゐる。これは彼の公平さを示すと同時に市民社會理解の抽象さを示すものである。蓋し交換價値に立脚する生産方法の行はれてゐる一國民を以てたゞ國民的諸欲望のためにのみ勞働するところの總合體と見

1) Lectures, p. 162-163.



做すことは一の誤つた抽象であるから。市民社會をよりよく理解するためには、商品の供給者たる生産者の立場に立たねばならぬ。そこで、商品生産者(所有者)の觀點に立つならば、人の知る如く、市民社會に於ける經濟の目的は交換價値の追求であり、生産のための生産である。國民的立場に於ては常に廉價と豊富が要求されるが、商品生産者にとつては交換價値の大なること、即ち高價が望ましい。而もその總額が大であるためには商品を豊富に所有しなければならぬ。とすればこゝでは廉價と豊富ではなくて、高價と豊富こそが私人の富裕である。ケネーはこの市民社會の要求を最も明確に道破して曰く、「豊饒と廉價は富ではない。稀少と高價は貧困である。豊饒と高價こそが富裕である。」<sup>1)</sup>と、こゝで豊饒といふのは共同富のそれではなくて生産者私有のそれである。即ち私人所有の富の豊富と高價が商品生産者の要求である。

然しながら、私人の豊富は抽象的共同富の豊富である。共同富の豊富は市場價格を下落せしめる。商品生産者は一方では高價を欲するが、他方に於て自己の富の豊富を望むが故に抽象的共同富を増大しその結果彼の欲せざる廉價を來さしめる。だから市民社會に於ては廉價即豊富といふ共同富の原則が私人の富の豊富といふ形で自己を貫徹する譯である。かくの如き形で自己を貫徹する廉價即豊富の原則は個人意識を超越した無自覺的必然的な社會法則(價格法則・需要供給の法則)として現れる。個人の意志とその競合の結果としての社會法則とのこの矛盾は市民社會に於ける國民の富の、抽象的共同富と個人の富とへの分烈の必然的結果である。要するに市民社會に於て

1) Quesnay. «Abondance et bon marché n'est pas richesse. Disette et cherté est la pauvreté. Abondance et cherté est l'opulence.» (Gide. Histoire. p. 18)

は生産者の高價と豊富の欲求を媒介として生産力は不斷に發展せしめられ、その結果彼等には社會法則と見える無自覺的必然性を以て共同富の原則たる廉價即豐富が實現されるのである。而してこの私利による社會全體の幸福の無自覺的實現、これこそはスミスが個人の利己活動を是認した本來の精神であつた。各人を自由に競争せしめて「事物をしてその自然的進行に委せる」ならば全體の幸福は自ら實現されるといふのであつた。

自由競争が行はれてゐる限り私利と公益とは比較的矛盾しなかつた。然しその一致は無自覺的であるが故に、自由競争がやがて獨占到轉化すると共に、私利は公益と乖離するに至る。國民の富は共同富の豊富なるにあるが、共同富の豊富は市場價格を下落せしめるから生産者の喜ばざるところである。高價を維持するためには共同富を稀少ならしめねばならぬ。<sup>(註)</sup>そこで生産者は團結其他の方法によつて獨占組織を形成し、自然價格以上の市場價格即ち獨占價格を獲得せんとする。その結果下層階級の窮乏の傍で商品は過剰に生産されたとして外國に投賣され、焼かれ、棄てられ、倉庫に詰込まれて腐り蝕むにまかされ、巨大な設備を徒にして生産は制限される。かくて共同富を稀少にして自己の商品の高價を維持せんとする生産者の要求は、再び、「商品をその自然價格以上に保つ」ことによつて「國民の富裕を減少する」に至る。こゝに於て人はスミスと同じく私的獨占の非をならす。けれどもそれはスミスと同じく經濟的自由實現を目指してゐあつてはならない。何を目標とすべきかは、即ち、將來への可能性は、現實が教へるのであつて、それは獨占

にまで進展した市民社會の中になほ無自覺的に貫徹しつゝある經濟法則を自覺的な經濟原則に變化せしめることであらう。

(註) 商品生産者の立場より見て、商品高價の原因としては供給稀少の外に需要の——量及び價格の上で——大なることを考へねばならぬ。需要とは購買力を伴つた欲望である。然るに國民の大多數たる労働者農民は上述及び後述の如く生産力の發展と共に増加する所得を有たぬ。従つて需要はこの側からは増大し得ない。需要が商品の増大に及ばないからこそ既述の如き商品生産者の悩みがある譯であるが、市民社會の問題は單に購買力の問題ではなくて、購買力を規定する生産の問題である。國民大衆の強制的節慾は廉價を齎す可能性こそあれ、高價を維持する力はない。そこで商品生産者は内包的に國民の需要を喚起する(政府の諸種の購買力補救策をさへ引起して)と共に、外延的に不斷に市場を海外に擴大すべく強制される。これが如何なる矛盾を有つかは別に考へ度い。

(四) 更に市民社會に於ては廉價即豐富は國民大衆たる非資本家的生産者にとつては、單に富裕を齎さないのみならず却つて不幸でさへある。市民社會に於ける資本家的生産者は單に交換價值をではなく最高の利潤を追求する。今大ざつぱりに利潤とは資本家的生産費以上の價格超過分と解する。最少労働による最大の使用價值といふ廉價即豐富の一般的經濟原則はこゝでは最少生産費による最高利潤の獲得と云ふ形で現れる。それが市民社會の經濟原則である。ところで生産費中所謂流動資本を形成する生産費の主たるものは勞賃と食料其他の原料である。市民社會に於ける資本家的生産者の經濟原則は労働力と原料とが最も廉價ならん事を要求する。これ等の商品所有者たる労働者非資本主義的農業生産者は弱者である。スミスが言つてゐる如く、「富者と貧者とが互に取引する場合には彼等が抜目なく取引すれば彼等双方はその富を増加するであらうが、然し

富者の財産は貧者のそれよりもより大なる割合で増加するであらう<sup>1)</sup>し、又前者の要求は貫徹される。廉價なるためには豊富でなくてはならぬ。相對的過剰人口と農産物の豊饒はこの條件を充す。廉價即豊富の一般的經濟原則は勞働力・原料特に農産物等の如き非資本主義的生産物に對しては市民社會の最大利潤の獲得といふ鞭の下に遺憾なく實現される。こゝに於ては文字通りに「廉價は豊富と同一事である。」けれどもこの事は交換價值に立脚する市民社會に於ては、それらの所有者を富ましめる所以ではない。廉價となればなる程、豊富に壓迫されて投賣し、又その總價額を大ならしめんとして豊富を齎し、更に廉價に拍車をかけるといふのが勤勞者及び農民階級の現狀でさへある。かくて非資本家的生産者即ち國民の大多數の立場に於ては廉價即豊富はむしろ惡であり、豊饒中の飢饉といふ様な現象も珍しくはなくなる。<sup>(註)</sup>而してこゝに於ても廉價即豊富は共同富の「巧智」ともいふべく、大多數人民の犠牲に於て必然的社會法則として自己を貫徹するのである。この法則を緩和せんとして國家は價格吊上げのための諸政策を講ずるべく餘儀なくさるゝにさへ至る。然しながら眞に國民を富裕にする道は社會法則に抵抗することではなくて、それを自覺的に具體化することであらう。

(註) 消費者的觀點から廉價即豊富はよいではないかとの抗議が起るかも知れぬ。消費の側を全體的立場に於て代表するのは國民共同富の立場であるから、こゝでは個人的立場に於て消費の側を代辨する抗議が問題となる。市民社會に於てはスミスが正しくも指摘してゐる如く各人は凡て多かれ少かれ商人である。彼が買ふためには先づ賣らねばならぬ。その限りに於て高價と豊富が望ましい。この事は非資本家的生産者にとつても同様である。だから市民社會の埒内に於ては極端なる

1) Lectures. p. 206.

2) W. o. N. Vol. I. p. 24.

廉價と豊富は、國民個人の立場に於ては決して幸福なる所以ではない。

(五) 最後に交換價值は貨幣を純粹獨立の形態として有つ。従つて市民社會の富は貨幣によつて表現される。交換價值・利潤の追求は貨幣の追求に外ならぬ。市民社會に於ては人は欲すると否とに拘らず貨幣を追求せざるを得ぬ。如何に眞の富は貨幣に存しないと主張すればとて、市民社會の法則は自己に關する限り強力的に之を否定する。富は貨幣に存しないとの思想は市民社會に於ては單なる理念にとゞまり實現され得ない。このネオ・モネタール・システムの基礎の上で、一度は排除された重商主義的政策が再び猛烈な勢を以て世界を席捲してゐる。よい品物を安く賣るのが何故悪いか」との抗議はネオ・マーカントイズムの前には單なる道德的感傷に過ぎぬ。即ち國際的規模に於ける廉價即豊富の破壊が起る。この點に關するスミスの批判は、そのまゝ妥當するかに見える。と同時に商品生産者の不斷の海外市場開拓の努力は世界の富の廉價即豊富を無自覺的に招來しつゝある事を看過してはならないのである。

## 七

以上スミスの廉價即豊富論を述べ、その一般的意義と市民社會に於ける意義とを見て來た。それは經濟價值一般の本質的構造として最少の勞働による最大の效果なる經濟原則を意味し共同富の原則をなす。その限りに於て廉價と豊富とは矛盾なく調和する。スミスは市民社會完成の門口に於て廉價即豊富こそ國民を富裕ならしめるとの精神から、そのためには生産力の發展が不可缺

の要件なるを見、中世的なる束縛と獨占、重商主義的の干渉の社會を批判し、自然的自由の制度の實現を提唱したのであつた。彼の經濟學が實現され、市民社會が完成されるや、市民社會が即自的に有つた矛盾は顯になる。私利と公益の乖離は國民共同の富と私人の富との矛盾として現れる。共同富の豐富は必ずしも廉價を齎さず、又個人の富を豐富ならしめない。のみならず資本家的生産者は高價を欲し、高價と豐富こそが彼等の富裕であり、嚮きの經濟原則は最少の費用による最大の利潤といふ形をとる。海外貿易も亦全くこの觀點の下に營まれる。こゝに於て廉價と豐富は商品生産者にとつてはむしろ惡となる。資本家的生産者は獨占によつてこれの惡を排除する力の有つが、この力乏しき非資本家的生産者及び大多數國民にとつては廉價と豐富は不幸そのものである。かくて國民的共同富の廉價即豐富の原則は個人富の要求と矛盾する。而も前者は無自覺的必然の社會法則として商品の高價と豐富といふ個人富の要求を媒介として自己を貫徹する。即ちスミスが要求した廉價即豐富は近代市民社會に於ては個人富を支配する抽象的普遍者としてのみ存在する。若し市民社會が何らかの形に於て止揚され國民が全一體として生産し消費する共同體が實現されるならば再び廉價と豐富とは矛盾なく統一され、かの無自覺的社會法則は自覺的な共同體の經濟原則となるであらう。それが實現を期するは現代經濟學の使命であらうが、そのためには先づ經濟學は國民を富ませるといふスミス精神へまで自己反省することが必要であらう。